



## 「The Vivid」主催による フォーラム開催のお知らせ

「女性と喫煙」について、フォーラムを開催いたします。

女性の身体と喫煙が及ぼす悪影響について、講演会を行います。禁煙指導もあります。

期日：平成17年11月5日（土）

午後1時30分

場所：長野県松本勤労者福祉センター  
大会議室

是非、ご参加ください。

詳しいことについては、

事務局 32 - 1464（上條医院）までお問合せください。

## 松本市内の女性専門外来のある医療機関

上條医院 女性外来（月4回、2時間）

33 - 8380（予約制）

信州大学医学部附属病院（月3回）

女性内分泌外来（加齢総合診療科内）

37 - 2797（予約制）

松本協立病院 女性外来（週1回）

35 - 5300（予約制）

## 女性と健康

# 女性専門外



「The Vivid」

左から矢崎まゆ子さん、上條順子さん、河野直子さん

かと悩んでいるより、まずはかかりつけの医者へ行って、相談することです。もし、女性の先生がよければ女性の先生のところに行つて相談しましょう。その先の専門医については、男性でも女性でもいいわけです。医者にかかりたくてもかかれないう人を無くすことが大切です。

に活気があれば、周囲も明るく、幸せになれると信じています。

「女性専門外来を受診して…」

数年前から、体調不良が続き、長い間通院していましたが、症状は思わしくなく、うつ気味になり悩んでいました。そんな時、女性外来の存在を知り、更年期も心配な年代ですので、受診しました。担当の先生から正しい更年期の知識、女性の身体へのいたわりの助言をいただき、精神的にも落ち着き、冷静に現実と向かい合うことができるようになり感謝しています。

（50代 女性）

病院に行つて、相談したり、治療する事は、抵抗がありますが、どうしてもよいでしょうか。

一番はかかりつけの医者をつくることです。家族でその医者にかかって、「おなか痛い」「腰が痛い」「今度は耳が痛い」と何でも相談します。先生に「耳が痛いなら、耳鼻科の先生紹介するよ」と教えてもらい、専門医に行きます。最初の入口は何科でもかまわないと思います。具合が悪くて何処へ行くこ

先生方から、市民の皆さんに伝えたいことはありますか。

大切なことは健康診断を受けることです。普段から健康に暮らすため、また、自分自身の身体を知るという意味でも、是非健診を受けていただくことをお勧めします。女性の健診は少ないようですが、健康についても前向きに考えていただきたいと思います。女性には、いつまでも輝いてほしいし、女性

まずは、ご相談ください。松本市の保健センター、女性センターへどうぞ。市で実施している健診に、

「壮・中年者健診（40歳以上）」、「高齢者健診（65歳以上）」があります。毎年、7月、9月の間に松本市内の指定医療機関で実施しています。この健診は、自分の健康状態を知るための良い機会にもなりますし、また、かかりつけの医者がいないという方には、かかりつけの医者を見つけるきっかけにもなるのではないのでしょうか。

ここ数年、新聞紙上などで「女性専門外来」という言葉を目にするようになりました。

女性と健康、女性専門外来について、中南信を中心に活動している「The Vivid」の世話人を務める3人の医師、上條順子さん、河野直子さん、矢崎まゆ子さんにお話を伺いました。

女性専門外来について、教えてください。

女性専門外来がなぜ誕生してきたかという点、女性のニーズがそれだけあったというのが一番の理由です。

「女性のいろいろな悩みは男性の医師ではなく、女性の医師に話したい。自分の本当の状態を誰かに分かかってほしい。」といった時に、女性が同性である女性に話しやすいからと始まったのが女性専門外来だと思いません。

日本の女性医療の草分けである天野恵子先生が「その人にあった医療をするためには、30分くらいきちんと話を聞かなければならないし、全ての科のことがある程度分かったベテランの医師でなければできません。」

ということ、女性専門外来を始められたのですが、女性のニーズが高いということが分かり、これは全国的にも必要であると広まってきました。

これからは、オーダーメイド医療、ひとりひとりの個人に合わせた医療が求められていると思います。そのきっかけが女性専門外来になればいいと思っています。

「性差医療」という言葉も耳にしますが、どのようなものでしょうか。

性差医療が言われ始めたのは、最近の事です。

例えば、これまでの医療だと、コレステロールの値が高いといえは、男女関係無く薬を出しましたが、女性は更年期以降にコレステロールの値が急に上がり、男性の場合は、割合若い頃から肥満で段々上がってきます。このような男女の違いに対して、同じ薬を投与して、果たして同じ効果があるかどうかということが疑問にされ始めました。

また、女性の場合、授乳中に薬を飲んで、子供に影響がでたなど、同じ薬でも女性の身体への影響が男性のそれと違うのではないかとこのことから、性差医療が注目されてきました。

今まで、薬のデータというのは、健康な成人男性で取られていました。女性のデータがないわけです。女性の身体は、更年期など、各時期で全然反応が違います。男性で効果があったから、女性に対しても、同じように考えていいかということが問題にされてきました。

そこで、男女分けたデータを

取りましようということになり、最近いろいろなデータがでてきました。もともと男女差があった疾患もそうですが、今まで同じに扱われてきた疾患についても、性を分けて考え、それぞれの状態にあった医療（個別医療、オーダーメイド医療）をしようというものが、性差医療の本質だと思います。



先生方が活動されている「The Vivid」について、お話を伺えますか。

「The Vivid」というのは、更年期の女性のトータルケアを勉強しようということで、始めた会です。

製薬会社の薬剤師さんの呼びかけで、中南信の女性の医師、薬剤師、看護師、栄養士等が集まって立ち上げ、活動をしています。

私たちが更年期女性を取り上げたのは、自分達はその年代に近づいてきて、自分たちの身体をよく知ろうということ、また同じような世代の患者さんから

相談を受けることが多くなったからです。

現在、会員は58名おりますが、平成11年から継続して、更年期に関する勉強会を行っています。更に、一般の方への啓発活動として、平成14年には、更年期をテーマとした演劇「輝く午後の光に メノポーズ物語」を招き、多くの方に観ていただきました。他にも、長野県の衛生部からの依頼を受けて、県内の女性医師にアンケートを取り、150人近くの女性医師の協力を得て、「長野県女性医師ネットワーク協力者名簿」の作成に携わり、女性医師のネットワークづくりを進めています。

